# 副市長直撃インタビュー

## 財政状況が厳しい中で、市民満足度と職員力を高めたい

**飯野正敏副市長**

大宮市（現さいたま市）出身。日本大学生産工学部卒業後、父が創業した飯野製作所に入社。２５歳の時にたった一人で矢板に来て、地元採用の従業員７人と飯野製作所矢板工場の操業を始めた。２００８年、５５歳のときに専務の役職で退社。２０１０～１２年、市の代表監査委員を務めた。

**県内十四市で唯一の民間企業出身の副市長が矢板市に誕生した。**

**就任して三カ月、現在の心境や、山積する課題へのこれからの方向性などを飯野正敏副市長（61歳）にお聞きした。**

**●民間出身者として期待されるものは？**

先日の議会の一般質問で、遠藤市長は「財政状況も厳しく、自治体間競争が激化する中で、自主性、自立性のある市政運営が求められている。そこで、市政に経営的運営を求め、トップマネジメントの最適化を図り、市長を補佐してもらうのが目的。市の経営資源である、人、物、金、情報を有効活用していくために、行政とは異なる文化に触れることで、職員の意識に変化が起こることを期待している」という趣旨の答弁をされた。

私は、市長の補佐役、ブレーン、相談役として、この趣旨を理解し、企業経営者としての経験を生かし、行政改革のために自分が正しいと思うことを遠慮なく言わせてもらっている。

**●民間と行政の違いは？**

**①利益追求の視点**

企業は、社員全員が、考え方や目的を共有し、利益を追求するためのシステムとサイクルがある。行政は、利益の視点で業務をしていない。

**②顧客満足度の視点**

企業は、環境に適応し、顧客満足度を向上させ、新たな顧客を創造することで生き残っていく。

行政は市民を顧客として考えたときに、市民に対し何を提供していくのかという「市民サービス供給会社」的な存在理由、存在価値があるのに、そのための施策が見えない。

顧客満足とは別に、市役所に来てくれるし、納税もしてくれることに甘んじてはいないだろうか？

**③稟議制度**

行政にはさまざまな事で、関係課内に回付し、承認を求める稟議制度があるが、民間では、重要な事でしか行わない。階層別の責任制度、つまり各部署に意志決定の権限がある。

**④予算制度**

行政では使い道と金額をあらかじめ決めて使い切るが、企業の場合、予算は使う計画があっても必ず使い切るものではなく、できるだけ使いたくない、残すという発想がある。

**●民間企業経験を生かして**

自助、共助、公助、そして互助の観点で市政のあるべき姿を描き、適時的確な手を打つために努力するつもりだ。

そのためには、民間企業経営で使われる、

①顧客の視点
②財務の視点
③プロセスの視点
④人的資源の視点
⑤革新と開発の視点

この五つの視点を基本に、さまざまな経営手法を駆使して、経営資源の有効活用を考え、経営目標を達成し、行政間競争に勝ち抜くつもりで改革を進めたい。

**●山積する課題、まずはひとつの成功事例を作りたい**

総合計画に沿って市の重点事業が決められているので、これをもう一度検証していこうと考えている。

何をすれば市民満足度が高まるのか、現在あるものを有効活用できないかなど、民間経営でよく使われる「見える化」などの手法を使って改善・改革を進めていきたい。

例えば、城の湯温泉は高齢者福祉施設という視点で捉えることもできるが、別の見方をすれば観光施設でもある。ちょうど指定管理者の更新時期でもあるので、「どうすればもっと市民の皆さんに満足してもらえるのか」「どうすれば利用者を増やしていけるのか」を基本に、維持管理するというだけでなく、「いくらなら貸せるのか」という経営的発想で有効活用できる方法を考えていきたい。

**●企業誘致について**

グローバル化、ＩＴ化の流れの中で、国際競争をしている企業の目は海外に向き、戦略的にいろいろな施策を実行している。そんな国内に目を向ける必要性がほとんど無い中で、企業誘致は至難の業。

しかし、それでも、自治体間競争に負けるわけにはいかないので、積極的に企業誘致はしていかなければならない。

**●職員の発想が変わるためには？**

人が変わっていくためには、感情が、感心→感動→感激→感謝→感無量と変わっていく事が必要。職員の皆さんと私が一緒に一つの事業をこなしていきながら、皆さんに感無量という感覚を持ってもらうことができればこれに勝る喜びはないし、新しい発想が浸透していくと思っている。

**●市民の皆さんへの希望**

矢板市が埋没しないために、全市民が矢板市の発展のためにどうあるべきかということを考え、我欲を捨てて、公共のためにできることを考えて欲しい。

最後に座右の銘はとお聞きしたら即座に、「今を生きる」ということ、燃えて生きて、死んでゆく。副市長の職を受けたのも『まだ何かできる、人生もう一度やれることがあるのではないか？』という気持ちがあったから」という答えが…。

大きな声で、自分の言葉で話す副市長の、元企業人としてのパワーに圧倒されながらのインタビューだったが、最後に、副市長を務めるにあたっての覚悟を垣間見た気がした。

（Ｍ・Ｏ）